むがしに、貧乏なお爺さんとお婆さんといであったど。こんだ、正月来たて、モチもつであげれねで、婆さんこんだ、

「モチ米の二升も買ってきてけれじゃ、お爺さん」

たば、そのお爺さん、

「んだって、ぜんこ一文もねば、買わえねぺエ」

そう言ったば、そのお婆さん、

「むがし家だおの、どこか、仏様のかげのあたり、床間の方のかげのあだり掃げば、出はらねでこどねかぺエ」

って、爺さんと婆さんの二人して掃いだば、あっちさ五十文、こっちさ五十文ではったんしけどよ。

そしたばしゃ、お爺さん、

「俺、あした行って買ってくる」

どて、朝まに出がけだでおんしゃ。

そしたばしゃ、行く時、沼さカモいっぱいおりで、遊んでいであったしけど。そのカモ取るどて、三十文ぶっつけてやったしけど。したば、ひとつも当たらねで、ただなげでしまったど。そのお爺さんしゃな、

「これ、いたましごどしたな」

ど思ったど。百文のうち、三十文なげてしまって、七十文しか残らなぐなったものな。そしてこんだ、ずうっと行ったば、たいした荒れできたしけでおんな。雨、風吹いで、こんだ、雪まざって荒れできたしけど。

したば、その時、お地蔵さま六人がらっと並んで、雨、風にあだってしゃ、だらだらとなっていたのだわけだ。したば、そのお

爺さん、

「あやあや、お地蔵さん。この寒どぎしゃ、なんにもかぶらねでしゃ。仕方ねエ、んだらなあ」

とで、少し行ったば店あって、そごさ行って、傘六つ買ったばしゃ、一つ十文であったど。まだ、六十文なぐなったしべったア。その傘、地蔵さまさかぶせであげだど。

婆さん待ってるべがら、あど残りでモチ米買うべと思ったば、こんだ、わア（自分が）、腹減ってはあ、なんども仕方なくて、残った十文あでエで、酒飲んで食ったば、ぜんこなぐなってしまったど。よげだくりゃ飲んだば、こんだ酔ってしまって、なに買うもねぐ家さもどったば、暗ぐなってしまったど。婆さんまだ、

「なんだけな、お爺さん、いまじぶん来て。モチ米よ」

と言ったば、爺さん酒に酔って、口きけなくて、

「モチ米もなにも、どうなったんでらわがらねじゃ。婆んばア」

って、そごさ、ごろっと寝でしまったど。

婆さん、小豆煮て待ってらたって、米も買って来ねべし、困ったじゃなアど思って、寝たど。

したば夜中に、家のかげの方で、グツグツしゃべって、ゴダゴダでエ音するでおんな。じんじょ（きっと）こりゃ、爺さん酒に酔って、なにか人さえぐねごと言って、仕返しに来ただなあと、婆さん思ったど。爺さん、酒に酔ってなにもできねべし、婆さんなんたごどあるがど思って、おっかなく寝でだしけどよ。しばらぐして、夜明けになったば、音ねぐなったしけどよ。なんだべどんたちしゃ、米がらカネがらモチがら、三袋持ってきて、置いで

あったど。それで、

「あのお地蔵さんだな。ありがでエ、ありがでエ」

って、お爺さんどお婆さんど二人して、拝んだどこだしけたア。